



TENTI TODAY			1
会員の広場			2
報 告	100 年前の国立市と大学通り	臺 一郎	2
論 文	郷土意識の変容と地方出版人の使命	北林 昇	5
歴 史	「了解日本(日本を知る)」(24)10, 外来文明の三部作(5)「中国と日本の対立」	愈 彭年	6
歴 史	E・ライシャワーの日本昭和史(5)	津田 孚人	8
事務局(追記)			1
			2

TENTI TODA

2024年度のノーベル平和賞に、日本原水爆被害者団体協議会(日本被団協)が選ばれました。わずか2年間の広島での暮らしでしたが、被爆の爪痕が大きく残っていた旧市街地での生活体験は忘れ難いものがあり、今回の受賞の喜びを心から共有できました。国際社会は、力の論理が優先する時代になり、核兵器の使用を仄めかす国もあります。原爆の恐ろしさ、悲惨さを知るのは日本だけ、「核兵器の非人道性を訴える草の根運動が評価された(日経新聞)」ことに大きな意義と、期待を感じています。

新内閣の成立そこそこに、衆議院が解散となりました。13日(日曜日)の昼12時半過ぎのJR日暮里駅前、警察官が多数出て道路を遮断し、交通整理をしていました。午後2時半から石破自民党総裁の演説会があるとのことでした。安倍元首相の例がありますから、警備も過剰になるのでしょうか、顔見世だけの演説会にならないように願いたいものです。多額の費用が無駄になります。

テレビの街頭インタビューで、「国会議員の数が多すぎる。減らすべきだ」と発言する高齢者がいました。近年、国の予算が大雑把になりました。国の財政資金がどのように使われるか、その結果がどうだったのか、知るべき権利が国民にあります。

巨額の国債

長期国債(建設国債)が初めて発行(昭和41年4月?)されたときに、大手生命保険各社は、毎月、数億円単位で、新規国債を引き受け(購入)しました。本来は証券で保有するのですが、金額が大きく大量になるので登録制度を利用して、登録済書を代わりに受領していました。その当時、市中では、借入れや、保証金の担保用に国債を借りたいというニーズがあり、国債を大量に保有する生保に、貸して欲しいという要望が証券会社、信託銀行などを通してありました。金庫に眠っている国債に

貸し料がつくのですから悪い話ではありません。問題は、要望が現物（証券）ということでした。そのため、そのつど日銀に行き登録債を現物の国債に変えてもらいました。

現在、気になるのは、仮にもシファンドなどが数十億、数百億の国債を購入したいときに、はたして現物（証券）を手にすることができるのか、どうかです。日銀が保有する巨額の国債、その現況が大いに気になります。

床屋さん、

街の本屋さんが減ったのを嘆きましたが、近年、「床屋」さんも少なくなりました。戦後はずっと理髪店を利用する時代が続き、家庭をもつ頃になると、家の近くの「床屋」さんに、休みの日に出かけるのが楽しみになりました。その後は、かつての勤務先近くにあった日本橋の「床屋」に長年通いました。新潟出身の話好きの店主、客を客と思わない話ぶりが魅力でしたが、高齢になって手元が危うくなり、顔そりでキズがつくようになったので、利用を止めました。最近、床屋さんがなくなったので、もっぱら駅近の簡易理髪店（整髪料1350円）で済ませている。

会員の広場

100 年前の国立市と大学通り

臺 一郎（75歳）

移築された三角屋根駅舎 幅 24 間長さ 1.5km の大学通り 左側は一橋大学キャンパス



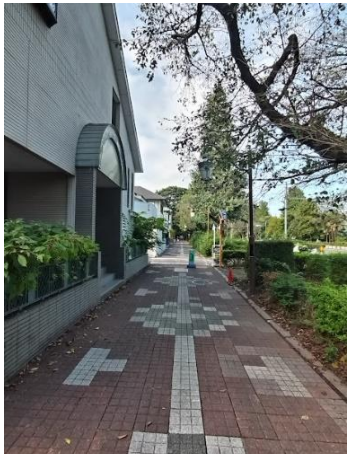
大学通り沿いの白亜の住



歩道と車道の間の屋外彫刻



綺麗なカラー舗装の歩道



昭和 30 年代の前半から後半にかけて、筆者が通学で 6 年間往来した国立市の大学通り。懐かしさもあって年に一度は訪れる。そして駅から約 1 Km 離れた桐朋学園中学/高校までを歩いて往復する。それが最近のお約束のようにになっている。今夏の 8 月、9 月はうんざりするほどの猛暑が続いたけれど、10 月になって漸く涼しくなったので国立を訪れた。

僕にとっての国立市とは、大学通りであり、桐朋学園であり、青春の思い出の地である。今回も自宅の最寄り駅である武蔵小金井から中央線に乗り、国立駅で下車して北口の駅前広場前に出た。目の前には駅全体の建替えで一端解体され、その後駅前広場のロータリーの真ん前に移築された三角屋根の旧国立駅舎がちんまりと鎮座している。

ちょっと古寺の伽藍にでも入るような感覚というか気分で、丁寧に再建された駅舎内部に入り込む。あっと驚くような空間が広がるわけではないが、木造建物ならではの柔らかくて温かみのある屋内空間に包まれてほっとする。

旧駅舎を出て、駅前広場のロータリー沿いを反時計回りに進んで大学通りの西側歩道の端に立つ。大学通りはここから片側一車線往復二車線の車道、道路両側の幅広な歩道、そして車道と歩道の間の緑地帯を合わせて幅 24 間(約 43 メートル)の道路が南に向けて 1.5 キロ先まで真っ直ぐに延びている。

この大学通りは第二次大戦前の未舗装道の時代に、複葉機が離着陸した事があるそうだが、それが可能くらい真っ直ぐで平坦な道路なのである。

ところで今回の国立の大学通り散歩では、大学通りが出来る以前や東京商大(現・一橋大学)が移転してくる前の谷保村国立地区(大学町)の様子を、国立市の郷土文化館まで足を伸ばして調べてみた。

ちなみに冒頭に掲載した写真 6 点は、いずれも現在の大学通り沿いの状景である。最初が移築された国立駅の旧三角駅舎、次が国高前バス停近くの歩道橋から国立駅方向を見た大学通り、三つ目が一橋大学のキャンパスを突き抜けるあたり、四つ目は桐朋学園前交差点から先の西側に続く白亜の高級住宅群、五つ目は車道と歩道の間の緑地帯に散在する屋外彫刻の一つ。で最後の 6 つ目は前面の歩道が綺麗にカラー舗装されたお洒落な住宅地である。

こうしてみると、この通りはそれ自体が手入れの行き届いた、美しく品の良い公園的空間である。自分が桐朋学園中学高校に通っていた頃は、通りに沿って進駐軍や米軍属のための安普請のアメリカン住宅なども点在しており、品格のある美しい通りという感じは特になかった。

現在の国立市は「1 億円を超える物件でも短期間で買い手が付くエリアで、国分寺や小金井ではそうはいかない」と不動産屋が言っていた。つまり富裕層が好む高級住宅地なのだ。実際現地に来てみると、かつては富裕層の住む街にしか進出しない高級スーパーと言われた紀ノ国屋が既に 1970 年に立地しており、なるほどそうかと納得する。

さて、以下では国立大学町の開発について簡単に解説する。大正 12 年(1920 年)の関東大震災により、東京商大は神田一橋の校舎を焼失し、大学は新たな移転先

を箱根土地株式会社（現・コクド）専務であった堤康次郎に相談した。堤は甲武鉄道（現・中央線）の立川駅と国分寺駅の間の谷保村に、百万坪近い規模のまとまった雑木林の土地があるのでそこへの移転はどうかと薦めた。

東京商大側の谷保村への移転意向に確かな感触を得た堤は、新たな大学町開発に伴う新駅設置を鉄道省に提案し了承を得た。駅舎は大正 15 年（1926 年）に箱根土地（株）が建設して鉄道省に譲渡した。駅名は隣接する国分寺駅と立川駅から一字をもらって国立とした。新駅開設と並行して堤は都市計画の策定と造成工事に着手。大学通り、富士見通り、旭通りなどの幹線道路の建設や電気・水道などの基盤整備を進めていったのだ。

甲武鉄道に国立駅が完成し、大学通り、富士見通り、旭通りが開通した頃の、つまり 1927 年頃の谷保村国立地区は、道路以外はほぼナラ、クヌギ、クリなどの木々の間に赤松や黒松の大樹が混じる雑木林で、地元住民は谷保村のヤマと呼んでいた。さらに国立駅が新設される以前は農家さえも殆どなく、細い林道が数本走るだけの広大な雑木林だった。現在の一橋大学構内にある林地はかつての広大な雑木林の面影である。

昭和 2 年（1927 年）頃の谷保村国立地区



明治前期の谷保村甲州街道風景



また甲武鉄道が開通する明治 22 年（1889 年）以前の一帯は、人家などは全く無く、狐や狸が生息する一面の広大な雑木林であった。当時谷保村の集落は、甲州街道から南側の多摩川にかけての水利条件に恵まれた一帯にあり、そこが住民＝農民の生活の中心であった。

さて、堤は集落など一切無かった国立地区での大学町の開発や分譲に際して、商大側からの要望を全面的に受け入れた。「粗雑なバラック建て」や「美観を損なう建物」を厳しく禁じ、工場や歓楽施設等の立地も一切認めず、《教育の聖都》を目指すという開発方針を、そのために会社経営が一時的に不振に陥ろうとも断固として貫いたのである。

そのことを知ってから、もっぱらがめつくて強欲なワンマン経営者というイメージが強かった堤康次郎が実は必ずしもそうではなかったことを知り、筆者も認識を改めた。

今日の国立市や大学通り沿いの街景観が、美しく、品格のある、落ち着いたものに成ったのは、その背景に開発者 堤康次郎のまさに堅忍不拔の意志と方針、そして確固たる街イメージがあり、それを受け継いだ歴代の村長、町長、市長等の尽力があったればこそである。この間ほぼ 100 年。まことにとって「良い街は簡単には造れな

い」のである。

郷土意識の変容と地方出版人の使命 北林 昇(長野県飯田市在住 76歳)

1) 山人たちの芸能の多彩な演出に驚愕する

私は学生時代影響を受けたドキュメンタリー映画作家から、『熊谷家伝記』について調査を依頼された。熊谷家のふるさとは信三遠(信州・三河・遠州)国境の長野県天龍村坂部。私はこの伝記が掛かれた1335年から1771年にわたる伝記を、年ごとに全国史と対照し、他の郷土史資料と併せて、信三遠国境年表にまとめた(『芸能の谷三巻』)。

この家伝は坂部の開発領主となる熊谷貞直(伯父は熊谷直実を先祖にもつ直方)が、南北朝の戦乱の中、1353年にこの地に落ち延びてきてから近世にかけての歴史を綴ったものである。**ここが私の地方史の認識と地域アイデンティティ形成、そして出版事業の原点となった。**

私は一か月余り天龍村の中心の町・平岡に下宿して坂部に通い、その地の古老たちや青年たちから話を聞いた。そこで驚いたことの一つは中世から近世にかけて起こった事件が、昨日の次のように語られ伝承されていたことだ。

当時の坂部分校の遠山校長が中世の逸話「若王子伝説秘話」を子供たちに演じさせたところ、村人たちが涙したという。そしてもう一点は、そこで一月四日から五日の朝にかけて行われる「坂部の冬まつり」に出会ったことだ。

その数々ある演目の中でも、「花の舞」は、四人の神子(かみこ)と言われる子らがお揃いの白衣を纏い花笠を被り、鈴や、つるぎなどを手に持ち替えて湯釜のまわりを二時間ほど休まず舞い続ける。そのクライマックスでは、祭りの場に村の青年や老人、そしてお母さんたちが、「きよせ きよせ きよめてかやせ」と子らを囲んで囃す。**村人が一つになったとても美しい光景だった。** この情熱があつたからこそ、今日までこの山里は歩みをつづけ、若妻会の皆さんが心を一つにして、困難な環境下で「柚餅子」の生産と販売に当たれたと思う。

この霜月神楽は、伊勢神宮外宮の流れを汲むといわれる湯立神事を祖型に仮面の鬼、翁などが登場、能など日本の伝統芸能の原形を吸収して多彩な芸能を演出、研究者が高く評価している。

私は、この祭りを皮切りに「新野の雪祭り」「奥三河の花まつり」「遠山の霜月まつり」「水窪西浦の田楽」のほか、この地に伝わる「念仏踊り」への探訪を始めた。

この地一帯は、日本芸能史研究のはじまった地であり、折口信夫、柳田国男、池田弥三郎、西角井正慶、そして三隅治雄といった民族芸能研究者の聖地であることが分かった。

私は、三隅先生をこの地に数回招いて「山村民俗芸能講座」を開催した。のちにこの収録した講話を『芸能の谷(全四巻)』としてまとめて発行した。またこの長野・愛知・静岡の県境地域の祭りや、それらをまとめたパンフレットの制作、そして南信濃村(現飯田市)より発注をうけ、信三遠国境の芸能ビデオの制作にあたった。邑びとたちの心の叫びを少し伝えられたかと想う。

元来、信三遠国境は、日本の中央に位置し、東山道、天竜川の水道、伊那街道、

遠州街道、秋葉街道をはじめ山間を縫う様に交通路が四通八達している。そのことから、古代・中世・近世にわたり期せずしてこの深い山壁に諸国の文芸が落ちて留まり発酵、神楽・田楽・猿楽・念仏踊と日本民族芸能の祖型を今日に豊富に伝えている。**つまり、日本古来の伝統芸能のエキスを凝縮され発酵して、世界文化遺産に通じる日本の宝庫だと言える。**

三隅治雄氏は、西の「国立民族学博物館」、東の「国立歴史民俗博物館」の間であるこの地に、「国立民族芸能博物館」の設置を提案されたが、自分も関わった南信濃村（現飯田市）では、「日本民族芸能伝承センター」の建設へ、まずは信三遠国境一帯の映像記録事業を行った。しかし、その建設構想は、折からの地方財政削減などから沙汰止みとなっている。生きた日本伝統文化としてその価値が世界的にも見直されるべく、建設されることを切望している。

日本文化の芸能のエキスを伝える集落が中世から今日までつづいてきた歴史的現実を疎かにしてはならない。「限界集落」と言って、これら山あいの里を切り捨てれば、日本文化はそのルーツを失う。したがってこれら集落が芸能伝承とともに生きつづけていけるかどうかは、これからの日本文化はもとより山国日本の未来を占うことになる。

（つづく）

「了解日本」（「日本を知る」（2019年出版）
（25）

俞彭年（87歳）

中国と日本の対立

中国が強くなる中、日本は何をすべきか？これは、多くの日本人が心の中で考えてきた深刻で切実な問題です。「中国脅威論」を提唱する人もいれば、「中国崩壊論」を提唱する人もいます。この2つの理論の本質は、中国を強くするのではなく、「日本が強く、中国が弱い」という構図を継続させることにある。

しかし今、中国の強さはいずれそうなると考える日本人が増え、心のバランスが崩れ、皮肉を言ったり、敵対的な態度をとったり、揚げ足取りをしたり、傲慢からだんだん劣等感に変化し、表面的には何気ないように見えますが、感情は複雑で抑制するのが難しくなっていく。もちろん、これまで威張ってきた日本の右翼の心理状態は特にアンバランスになります。

1894年から1895年の日中戦争で、日本は中国の巨大な清王朝をなんと打ち負かしました。10年後の1904年から1905年の日露戦争で、日本は巨大な帝政ロシアを打ち負かしました。この2度の勝利は日本人の自信を大きく高め、「日本が上、中国が下、日本人は優秀、中国は無能」という思考規範が次第に形成され始めました。

日本は1945年に中国や米国などの同盟国に無条件降伏しましたが、この考え方は捨てられなかった。かつて多くの日本人が著者にこう言った：私たち日本人は今、公にそう言うのはよくないが、心の中ではずっと日本が敗北したが、これは米国に負けただけで中国に負けていないと思っている。中国の勝利は米国について得たものであり、当時の日中両国の軍事力の比較によって言えば、中国が日本を負かすことは不可能だった。

1970年代から1980年代にかけて、苦しい努力を経て世界第2位の経済大国を築き上げた日本人は、その偉業によって再び自信を取り戻し、「日本は上にあり、中国は下にある。日本人は優秀で、中国人は無能だ」という考え方の規範は再び実証されたと考える。第二次世界大戦後、日本はさまざまな理由でこの考え方を公に推進しませんでした。中国との付き合いの過程で、この考え方は依然として日本人の心を支配している。歴史教科書問題、靖国神社参拝、慰安婦問題、拉致労働訴訟などが長い間、迅速かつ完全に解決されていないのは、このような考え方が根底にあるからです。

1990年代以降、中国と日本の間には対照的で異なる2つの光景が出現しました。1990年代、中国は急速な発展を続けましたが、日本は停滞しています。21世紀に入り、21世紀半ばまでに中華民族の復興を実現するという大目標を掲げた中国は急速な発展を続けましたが、日本は未だその苦境から立ち直っていない。

東京大学名誉教授の溝口雄三氏は、この中国の発展を「中国の衝撃」と呼び、日本は、19世紀半ば「西洋の衝撃」を受け、現在「中国の衝撃」に直面している、と指摘し、今回の衝撃を正しく理解し、対心理状態を正すように、と話している。

日本は、時代が変わり、100年近く続いてきた古い考え方はもはや現実にふさわしくなく、新しい考え方を策定する必要があることを認識する必要がある。客観的で公平な学者によって、時代の変化や日本が中国とどのように向き合い、中国とどのように付き合っていくべきかを分析した本がたくさん書かれている。

昨今、日本人のアンバランスなメンタリティを個人的に批判し、その弊害を指摘する人が現れ始めていますが、立ち上がって大胆に自分の意見を表明できる人はほとんどいません。これは日本社会の世論の圧力がまだ大きく、相互に傷をつけることが許されていないことを示しています。

現在多くの日本人は理性と感情の間に矛盾が生じ、心理状態のアンバランスを招いています。理性は現実を認め、中国の大勢が強くなるのは必然だと思っているが、感情は現実を認めたくない。

この矛盾の結果は、かつて日中間にあった「政冷経熱」の局面です。今では多くの日本の媒体の中で右翼メディアの中国報道は、客観的公正さを失うことが多く、特に否定的なニュース報道を好み、行間には人の災いを喜び、一顧だにせず、嘲笑や皮肉などの表情がにじみ出ており、彼らのバランスを失った心理状態がはっきりと反映されている。それは妬ましく切なく、嫉妬して、ひねくれていて偏っていて、悔しくてどうしようもない心理状態です。

しかし歴史は、日本人が危機を克服し、変化した局面に適応し、新しい局面を切り開くことが上手であることを証明しています。近い将来、日本人は古い思考規範を棄て、新しい思考規範で中国と付き合うことになると思っています。

現在、中国と日本は適合の時期にあり、新しい関係を築いています。適合期間を短縮するために、双方が協力する必要があります。中国は「中国の平和的発展」、「隣人に親切であり、隣人と提携する」、「友好的で安全で繁栄する隣人」の原則を提唱しています。これらは古代の「中華—東夷」関係を再現しようとする日本人の懸念を解消するのに役立つでしょう。

中国は大国の風格で慎重に疑惑を解消し、ここ数年、中国国内で一部の人の見られる浮ついた心理状態とその表現は、すでに中国のイメージを大きく損なっています。中国が前進する目標について日本人を戸惑わせている。

百年以上の苦難を経て意気揚々としている中国人には、魯迅先生が言った「今の両国の隔たりは非常に長い、長い年月をかけて苦難して渡り尽くせば、もとより兄弟である。逢って笑いかければ、深いうらみも消え去るだろう」という寛大さと心があるはずです。(2011年6月)

E・ライシャワーの日本昭和史(5)

津田 孚人(87歳)

参:「ライシャワーの昭和史・ジョージ・R・パッカー著・森山直美訳、講談社」

ライシャワーは、1930年代に日本のナショナリズムの醜い面に気づきようがなかった。大学におけるリベラル思想の抑圧を知ったならば、たじろいだに違いない。リベラルな左翼の知識人は次々と、新しい国家主義への「転向」を経験し、公に、自分の考えの誤りを懺悔していた。

1937年、ライシャワーは朝鮮半島で、日本の軍事占領者たちの傲慢さと残虐行為を目にするが、自伝ではこうした日本のネガティブな側面を取り繕っており、後年の記述では、1930年代を、近代化と民主的な政府へ向かう日本の悲劇的な逸脱と位置づけている。

軽井沢時代のテニス仲間、E・H・ノーマンなど他の学者たちは、まったく異なった見方を採り入れた。彼らは、30年代の日本を原形への逆戻りとみた。もとより本当の意味では、一度も近代化したことが無い国家、さもないと、明治時代(1868～1912)に「部分革命」を経験しただけの国家に、封建主義と軍国主義の名残が再現している、明治以前の国家の継続と見たのである。

これらの学者は後に、「日本は民主的政府を本当に受け入れたことはなかった」「大正デモクラシーは、まやかしだった。軍国主義者に率いられた支配階級が勝つに決まっている」と主張する。結局、この主張が、ライシャワーは日本に甘すぎる(あるいはおめでたい)か、それ以下だ。そしてアメリカ帝国主義の冷戦エイジェントだ、という批判につながっていく。

ライシャワーはノーマンと違う考えだった。のちにこう反論している。

「日本における軍国主義的感情の再燃と議会政治の放棄について、たんに日本がより初期のパターンへ回帰したに過ぎないとか、あるいは封建的傾向の復活である、といった説明がよくなされているが、そのような解釈は日本で起こったことの真の意味を見落としたものである」「軍の将校たちはサムライではなかった。その新しい社会で彼らが代表していたのは、富と貴族的出自をもった特権階級ではなく、むしろ下層階級だった。」「軍隊では、実業界や政界に比べると、世襲制の威信と権力の入り込む余地は、はるかに少なかったのであり、その意味で、日本社会で軍隊ほど封建的な過去から遠いものはなかった。陸海軍の青年将校たちは、都市や大企業に対して田舎者らしい不信感を抱いており、およそ『現状維持』を主張する者ではなく、また昔の封建的な経済的な均衡への復帰を主張する者でもなかった」。

このように対立する解釈がたんに学問上の論争であったならば、とうの昔に忘れられるか、博士論文で扱われるだけだったろう。だが、この対立は、アメリカによる占領

の構想に関する戦後の討論の根幹となっていく。

もし日本は、社会革命がなければ真の平等主義かつ民主主義を実現できないとしたら、天皇を戦争犯罪人として扱い、戦後日本に登場した幾人もの指導者は権力の座から締め出されるべきだった。労働者と左翼政党に社会改革計画を自由に実行させておくべきだった。

その一方で、仮に、議会制民主主義が戦前から日本に強い基盤をもっており、恐慌の影響や軍部による乗っ取りによって崩されただけであるならば、まったく別の形の占領が必要になる。

この期間、アメリカのメディアは悪意に満ちた人種差別的な日本観を採用した。『タイム』の発行人、ヘンリー・ルースや、中国の農民をこよなく愛すパール・バックといった「中国びいき」が率いるかたちで、天皇の命令に狂信的に従う、残忍で愚かな軍国主義者という日本人像が喧伝された。

このような困難な時代を生きぬいてきたライシャワーが、どうして日本人を楽観的に見続けることができたのか。考えられるのは、彼は狂信的な右翼と直接ぶつかることがなかったということである。

日本人の中にはアメリカに敵意をもつものが少なからずいたが、「私も、家族の誰も、日本人から敵意を感じたことは一度もなく、日本の友人たちとの関係は以前と変わりなく温かいものだった」。日本での交際相手はおもに家族の友人たちだった。クリスチャンで、西欧で教育を受けたりベラリストや知識人であり、日本が軍国主義に傾いていくのを嘆くような人たちだった。

後年歴史家としての彼は、巢立ちしたばかりの日本の議会制民主主義における政党の業績を強調した。1936年2月20日の決定的な選挙では、総得票数の78パーセント近くが政党に投票した。「数百万の日本人、ということは過半数の日本人が、現実に行き起きていることに同調していなかった可能性が高い」と、後年書いている。

この解釈によれば軍国主義者が世界の出来事と国内の不景気を利用して、権力を手に入れ、いやがる国民を絶望的な戦争へ引き込んだということになる。

この時、ライシャワーは、本質的ではない雑音は無視して自分の知的な目標に集中するという点で、眼を見張るような才能を発揮した。彼は、唐朝の専門家の道を志し、中国と日本の古代史の文献を研究したいという強い願望をもって日本に来ていたのである。

パリで中国研究をしていたポール・ドミエヴィル教授から838年から847年にかけて中国を旅した日本人僧侶で、ほとんど無名だった円仁（諡号：慈覚大師）の日記を翻訳してはどうかと勧められた。ライシャワーは、周囲の政治的な混乱には目もくれず、かつて日本にいた外国人研究者が取り組んだなかで、最も労力を要する研究に喜び勇んで飛び込んだ。

彼の流儀による研究は、円仁の足跡を訪ねて、東京、京都、戦火を被った中国、占領下の朝鮮半島へと旅することを必要とした。第二次世界大戦中の5年間のブランクはあったが、それから20年にわたり、『円仁の日記—入唐求法巡礼行記』と『円仁—唐代中国への旅』の研究は、彼の時間のかなりの部分を取り、1955年によく日の目を見た。

この25歳のアメリカ人大学院生は、いかに大それた厚かましいほどの自信をもっていたことだろう。日本人も中国人もほとんど聞いたことが無い僧侶が書いた、一千年以上も昔の日本語文献を見つけてこう言ったのである。

「この種の偉大な歴史的文献は、時間的には中世に属し、地域は極東に属しているが、われわれ人類の共通の遺産であり、そうした時間と空間の境界を越えた意義をもつ。これは世界史における一人の重要な旅行者の記録であり、未進化で野蛮な初期の時代から非常に高く陰難な現在の地位へといたるまでの、長く苦しい旅路の途中で通過した地点を、直接目にした者のおどろくべき体験記録である」

この一文は、彼の歴史の書き方を特徴づける大胆なアプローチの最初の兆しを見せていた。

1930年代には、日本と中国でごく少数の学者を除いて、円仁の日記に関心をもつ人はいなかった。1955年のライシャワーによる日記の英訳は、日本と中国の両方で広く崇められ、研究されるようになるほど強い関心をよびおこした。『円仁—唐代中国への旅』の日本語訳は、1963年に出版され、その後、フランス語、ドイツ語にも訳された。1999年に出た講談社学術文庫版は、10年後の2009年に11刷になっていた。

著名な仏教学者、中村元博士は、日本語版に寄せた序文で、これは信頼できる真正の研究であると賞賛し、こう書き述べていた。

「円仁と彼をとりまく人物群をあたかも目(ま)のあたりにするかのごとくに生き生きと描写している。日本人の、しかも千百年前の登場人物の心理を心憎いまでに浮き彫りにしている。……当時の仏教信仰の実情に同情的な理解が漲っている」。また司馬遼太郎は、「『入唐求法巡礼行記』が、人類の一財産として……こんにち町の書店の書棚にかかげられるようになったのは、ライシャワー教授の英訳本『円仁—唐代中国への旅』が出てから(1955年刊行)である、と紹介している。

円仁は間違いなく並外れた人物だった。838年、九州から揚子江の河口までの危険な水域を渡航したときに難破してしまうが、なんとか中国の海岸までたどりつき、それから9年間、ありとあらゆる種類の信じがたいような苦難を体験する。

その日記に、旅の途中で出会った中国の役人、朝鮮の商人、仏教の僧侶たちとのやりとりをつぶさに記録し、唐時代の中国の旅で見聞した祭り、タブー、神話、仏教への迫害を事細かに書き留めている。

ライシャワーは、何がきっかけでこれほど困難なプロジェクトに取り組んだ名だろうか。彼曰く、「円仁の日記は、極東史上最初の偉大な日記というだけではない。各国の訪問者が書き記した中国における最初の生活記録でもある」。さらに「最重要な歴史文献の一つであり、当時世界史の最先端にあった国家と人々について、非常に興味深い詳細な描写を含む、その時代ならではの一次資料である」と。

円仁が9世紀に手書きした漢字を翻訳するという作業の難しさは、想像を絶するものだった。円仁は筆記体の漢字を使って書いたが、彼の中国語力は完璧ではなかったし、その手書き文字は必ずしも明瞭ではなかった。そのうえ、現代中国語とは意味と発音が異なる、口語と古典語まじりの中国で書いてあった。

ライシャワーは、天台宗の僧侶、勝野隆信とともにその作業をした。勝野が中国語を現代日本語に翻訳し、それをライシャワーが英語に移し替えた。

1291年、72歳の僧侶がふるえる手で書いた小さな文字の写本(京都の東寺に遺されていた)を、1926年に写真複写したテキストと、1918年の印刷されたテキストを使って翻訳した。1918年版のテキストでは、漢字に返り点がついていた。テキ

ストの一部は虫に食われて解読不能だった。元の中国語では数字と時制が明確にされていないため、英語版で加える必要があった。古典的な中国語には節と文章のあいだに句読点が無かった。日記全体は、約7万の漢字からなり、英語に直すと409ページになった。

ライシャワーは骨の折れる翻訳をしながら、明らかに対象者を賞賛するようになった。「その時代のもっとも偉大な聖職者となってからも、「円仁」はどうやら名もない巡礼者、熱心に旅をする学究であった時と同じほどに、純粋な信仰をもち、仕事に献身し、対人関係では非の打ちどころのない人でありつづけた」。

ライシャワーが見た円仁の人物像は、突き詰めると「精力と知性と人格のあいだに類まれなバランスをもった大人物だった。卓越した能力をもち、行動が決然としているのと同じほど、品行は聖人そのものであり、一貫して、強く揺るぎない信仰心に駆り立てられていた。……自分自身の強い決意と人を鼓舞してやまない人格を自ら示して、他の者が発見した新しい地域を明らかにするという、華々しさは劣るが、より困難な任務を、同胞の先頭に立って行った人であった」。

この円仁の人物描写は、ライシャワー自身の目標と理想を知る手がかりを明かしてはいるように見える。正統的なかたちでは宗教人にならなかったが、彼もまた、溢れる精力と知性と人格をもった人物となっていた。極度の自信と精力がありながら人柄は謙虚という稀有な組み合わせは、学者として、また官吏としての生活の両方で顕著になり、キャリアの最初から最後まで、彼を敬愛してやまない友人と、批判者を生むことになった。

大使就任後、ライシャワーは、円仁に敬意を表する意思表示をした。1963年4月、夫人のハルを伴い、比叡山延暦寺に客として2泊して円仁の1100年遠忌に参加、夫人と祭壇まで進み、円仁の肖像画に花と自著をささげている。翌年3月には、栃木県にある円仁の生誕地として名高い壬生寺と大慈寺を訪問した。

(つづく)

新聞記事より

1) 火葬後の「灰」誰の者

年間157万人が亡くなる多死国家の日本で、遺体を火葬し骨つぼに収めた後に残る「残骨灰」の扱いが揺れている。含まれる貴金属などの売却に動く自治体が目立ち、日本経済新聞の全国88都市への調査では、2023年度の売却額が19年度の3.4倍になった。一方で、住民感情に配慮し、売らない例もあり、対応は割れ、国に整備を求める声が上がっている。

火葬場に残る残骨灰は、故人が生前に歯科治療した時に使われた金やパラジウム、人工骨に含まれるチタンなどの有価物が含まれる。一部の自治体では、これらを売却し、火葬事業を支える収入源としている。墓地埋葬法には残骨灰の取り扱いに関する規定がなく、残骨灰が誰のものが曖昧な状況がつづく。(以下略)

(日本経済新聞・9/17朝刊)

2) 日本人は旅行を止めたのかー日本の旅離れ・3つのポイント

1) 航空便を巡る交渉にも影響が

観光政策、特に航空便を巡る交渉は互惠主義が基本。相互に客を送りあう見通しがあってこそ航空会社は増便に踏み切れる。病気や、景気などのリスク回避に加え、航空代や旅先の消費で一方的な貢献になることを避けたいからだ。過度な黒字が摩擦を産む貿易と同じで、日本人の海外旅行不振は、「いずれ訪日客誘致にマイナスとなる」(政府観光局)

2) 欧米やオーストラリアにはギャップイヤーという制度があり、大学入学前などの若者が留学や長旅で視野を広げる。1960年代の英国で国際人材育成のために始まり、英語圏を中心に普及したとされる。ドイツやフランス、北欧では長期・複数回の有給休暇取得や学校休暇の分散で国民の旅を後押しする。こうした背景からコロナ後の旅行回復も早かった。

3) 日本でも、若者の旅の後押しが始まった。パスポートの発行費を自治体などが負担したり、公立学校の修学旅行費に関する上限規制を見直し海外に行けるよう検討したりという動きがある。Shibuya109lab の調査(15~24歳、2023年)によると、海外に行きたくない理由の上位3つは、経済、治安、語学力。費用の援助や、正確な情報提供が鍵となる。

(日本経済新聞・9/17朝刊)

事務局

(

(追記) 内山さん(故小俣光夫の友人)が、天地シニアネットワークのHPをつくり、データとして残されている、ネットワークテーブルの既発行分を収録されました。天地シニアの足跡がご理解いただけたと思いますので、ぜひご覧ください(津田)

天地シニアネットワーク事務局 (津田 孚人)

住所: 〒116-0001 荒川区町屋3-2-1

ライオンズプラザ町屋703

メールアドレス: tentisenior06@gmail.com

電話(携帯): 090-2534-1316